

【暗唱聖句】「しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。」第一コリント 2:9

【今週のポイント】

【日曜日・終末の幻】

イエス様の12弟子の中で最も高齢まで生き残ったのはヨハネでした。しかし、その晩年、愛する者たちや教会から引き離され、一人パトモス島に島流しになったのでした。他の弟子たちはもうすでに亡くなっており、ただ一人生き残った最後の弟子ヨハネは、一人孤独の中にいたのです。しかし、その孤島において、ヨハネには最後の仕事がありました。それはこれから起こることが壮大な幻が示され、それを書き記すことでした。ヨハネは、「ある主の日のこと霊に満たされ、後ろの方でラッパのように響く大声を聞きます（黙示録 1:10）。場所は関係がないのです。どこにでも主はともにおられるのです。むしろ、孤島において一人となったからこそ、静かに神様とだけ対峙することができたのではないのでしょうか。環境の影響は決して小さくないことは事実です。しかし、神様の力はさらにそれを上回っているのです。

【月曜日・カウントダウン】

世の終わりが近づくと、様々なしるしが現れるようになってきます。それは「産みの苦しみの始まり」（マタイ 24:8）と表現されているとおり、様々な苦しみが連続的に起こり、それが終わりのしるしとなっていきます。一難去ったらまた一難が来るように、苦難が終わらなくなるのです。2019年12月に、中国の武漢で新型コロナウイルスが発見されて以来、瞬く間にコロナウイルスは世界中に広がり、パンデミックとなりました。後を追いかけるようにワクチンが開発され、これで落ち着くかに思われたのですが、ウイルスが変異し、落ち着くどころかより一層感染力が強まって、日本でも1日2万人を超す感染者を出すようになりました。この終わりなき戦いを前に、イエス様の言葉を思い出すのです。「産みの苦しみの始まり」が始まった。なぜ、終わりのしるしとして、苦難が連続して起こるのでしょうか。それは一人でも多くの人に最後の悔い改めのチャンスを与えるためではないのでしょうか。其れと共に、イエス様は私たちを、イエス様と離れることのない状態へと導こうとしておられるのです。のど元過ぎれば熱さを忘れてしまうのが私たちです。だから、イエス様は最後のときにイエス様を忘れることがない状態へと持って行かれるのです。そう考えれば、苦難が続く意味もわかります。ノアの洪水のときのように、平和のときに突如最後が訪れるのとは異なるのです。しかし、苦難がどれほど続き、どれほど終わりのしるしが見えるようになって、多くの人が何ごともないかのように生活を続けます。イエス様はこう言われました。

「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである」マタイ 24:38、39

さらに、次のような御言葉もあります。

「終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけて、こう言います。「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。」第二ペテロ 3:3、4

しかし、産みの苦しみは始まっています。終わりの時のカウントダウンは始まっています。

【火曜日・前進命令】

「現代の真理」と呼ばれるものが、黙示録の14章6～12に書かれてあります。3人の天使がそれぞれ終わりの時代のメッセージである「永遠の福音」を語りますが、私たちはこれを「3天使の使命」と呼んでいます。まず、第一の天使が、「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」と大声で告げます。このメッセージには天地創造の記念日である安息日の回復が含まれています。第二天

使は「倒れた。大バビロンが倒れた」と叫び、第三天使は「だれでも獣とその像を拝み、額や手にこの獣の刻印を受ける者は、神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、火と硫黄で苦しめられることになる。また昼も夜も安らぐことはない」と告げます。今期の「キリストにある休み」と真逆のメッセージです。つまり、彼らはキリストの休みを知らないのです。

【水曜日・安らかに休む】

ヘブル 11:13 「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです」

もし、家がなかったとしたらどうでしょうか。どんなに小さな家でも、本来家というのは、ほっと安らげる場所です。かつて信仰の勇者たちは、地上に家はなく、旅人であり、いつも仮住まいでした。これでは安らぐことができないと思えるのですが大丈夫でした。それは、もっと素晴らしい住まいが天にあり、それを待ち望んでいたからです。天に用意された住まいへ行くには、死んで復活する必要があります。私たちは死を眠りと表現するのは、目覚めるときが必ず来るからです。これを復活と言いますが、もし復活の希望が無ければ、死は安らかな眠りとはなりえなかったことでしょう。私たちは眠っている間のことを覚えていないように、死も一瞬のことです。1000年前に眠りについた人でも、昨日眠ったかのように復活の朝を迎えるのです。

また、この地上の苦難を味わわなくても良くなるために、死は安らぎと表現されます。この地上の出来事は一切わからなくなるのです。死んですぐに天国に行くのだと信じている人も少なくありませんが、そうすると復活の意味が無くなりますし、もし、天からこの地上の苦しみを見ているとすれば、天国とて安らぎとはならないことでしょう。

【木曜日・主にあっていつも喜んでいなさい】

フィリピ 4:4 「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい…主はすぐ近くにおられます」

聖書は主にあって常に喜びなさいと繰り返します。なぜなら、主はすぐ近くにおられるからです。不安や困難の中では普通、喜ぶことができなくなってしまいます。しかし、それでもなお喜びなさいと主は言われるのです。終わりの時が近づくとつれて、産みの苦しみは増すことでしょう。陣痛は出産が近づくほどに増してきます。陣痛に耐えられるのは、命が生まれようとしているからです。この地上がますます混沌とし、日々の生活が苦しく、辛くなったとしても、私たちは信仰で喜ぶのです。かつての信仰者たちが、約束された天の故郷を思って喜んだように、私たちも天の故郷を見つめて、信仰で喜び、感謝の言葉を口にします。そのとき、世界が違って見えてくるはずですよ。